

〔『法学新報』第27卷11(314)号 大正6年12月5日〕

○故奥田学長追悼式並演説会

秋風枯葉吹いて寒威正に骨髓に徹す吾等同人誰か寂莫の感なきを得んや嗚呼我奥田学長溘焉として館舎を捐てられしより月を更ふること既に四、吾人は愈追慕の情を加来れり去月二十八日は故学長百个日の忌辰に相当するを以て中央大学に於ては同日午前学長理事其他学員会理事評議員諸氏向島弘福寺に於ける奥田家の法要に参列し午後二時より仮校舎第五号室即ち三百余坪

の大講堂に於て追悼の式を挙行したるか式場並に左右の入口通路には黑白段段の幕をはりつめ正面には新に成れる故学長の油絵肖像を黒布を以て一面に蔽ひたる祭壇上に安置し左右に花環を装る定刻学生並に学員其他教職員一同の著席するや岡野学長は徐に壇上に現はれ先づ祭壇に拝礼し了りて一場の演説を為したる後恭しく左の祭文を朗読せられ

嗚呼我中央大学学長奥田博士薨去以降既二一百日哀愁尚吾人ノ懐ニ新ニシテ音容髣髴トシテ目睫ノ間ニ存シ生前ノ事業ヲ追憶シテ感慨禁スルコト能ハス曩ニ故学長不幸ノ事アルヤ吾人ハ故学長ト本大学トノ關係ニ顧ミ校葬以テ永ク故学長ノ遺芳ヲ記シ併セテ其ノ在天ノ英靈ヲ慰ムルノ内議ヲ凝ラシタリ時ニ学長ハ適々東京市長ノ任ニ居リ為ニ市葬ノ議頗ル成熟シタルモノアルヲ聞ク此ヲ以テ吾人ハ姑ク市ノ為ス所ニ任セ本大学職員及学生等亦市葬ニ参シ以テ故学長ニ永訣ヲ告ケタリ然レトモ本大学ヲ以テ之ヲ觀ルニ単ニ市葬ノ一事未タ以テ故学長送葬ノ礼ヲ尽シタルモノト謂フヘカラス乃チ茲ニ本日故学長一百日忌辰ニ値リ本大学關係者一堂ニ相会シ故学長ノ英靈ヲ此ノ祭壇ニ迎ヘ聊カ微奠ヲ薦メテ追悼ノ誠意ヲ表セムト欲ス即チ今日ノ追悼会ハ是レ故学長ニ対スル校葬ノ義ト解スルモ亦不可ナシ

茲ニ少シク既往ニ溯リテ故学長ト本大学トノ關係ヲ昭ニシ以テ故学長多年ノ功業ヲ追憶スル所アラム抑本大学ハ創立以來屢々其ノ校名ヲ更メタリト雖モ当初英吉利法律学校ト称シ英二明治十八年八月ノ創立ニ係ル其ノ創立ニ与リタル者ハ英米

ノ法学ヲ研鑽シタル朝野新進ノ学者十余名ニシテ故学長亦実ニ其ノ一人タリ開校以來故学長ハ其ノ富贍ノ学識ト達辭ノ能弁トヲ以テ講壇ニ立チ幾多重要ノ科目ヲ担任シ諄諄教授シテ倦ム所ヲ知ラス故学長ハ単リ講壇ノ人タリシノミナラス設立者トシテ又維持員トシテカヲ同志ト戮セテ学校経営ノ事ニ任シ銳意勵精偏ニ創設ノ目的ヲ達セムコトヲ努ム故学長ノ正式ニ幹事ノ任ニ就キタルハ明治二十六年二月ニシテ爾來專心一意本校経営ニ膺リ多年繼續シテ其ノ任ニ在リ三十六年七月大ニ校基ヲ鞏クセムカ為ニ其ノ組織ヲ改メ社団法人ヲ作り校名ヲ東京法学院大学ト更ムルヤ故学長ハ新法人ノ社員ヲ以テ理事ニ擧ケラレ新任学長菊池博士ヲ佐ケテ校務ヲ執ル三十八年八月再ヒ校名ヲ中央大学ト改メ益々規模ヲ擴張ス四十五年七月菊池学長逝去ノ後ヲ承ケテ学長ト為リ大正二年三月文部大臣ノ大命ヲ拜スルト共ニ学長ノ任ヲ辭シ岡村博士其ノ後ヲ襲ヒ博士ノ其ノ任ヲ辭スルヤ再ヒ擧ケラレテ学長ニ任シ爾來繼續シテ本年八月薨去ノ際ニ迫ヘリ大学制度組織以後本校ノ面目大ニ一新シ發展迅速ニシテ基礎亦益々鞏ク優ニ我邦學術界ノ重鎮タルノ勢ヲ為ス但々此ノ校運ノ隆昌ヲ啓クニ至ルマテ各般ノ障碍前路ニ横ハリ幾多ノ困難層層紛起シ理事者経営ノ苦心実ニ想像ノ能ク及フ所ニアラス故学長ハ此ノ困難ナル時代ニ當リ親シク本校ノ枢機ヲ握リ心血ヲ瀝キテ一意其ノ事ニ從ヒ終ニ能ク今日ノ隆運ヲ来スコトヲ得タリ開校以來星霜ヲ經ルコト三十有三、業ヲ卒ル者約一万各各其ノ器ノ宜ニ從ヒ公私百般ノ業ニ服シ直接ニ間接ニ交交國家ノ文運ニ貢獻ス是

レ皆親シク故学長ノ教ヲ受ケ其ノ薰化ニ浴スル者故学長ノ國家文運ニ功勞アルヤ亦大ナリト謂フヘシ
 憶フニ我中央大学ノ今日アルヲ得タル所以ノモノ固ヨリ同志奮勵學員一致ノ力ニ頼ルト雖故学長ノ終始一貫シテ校務ニ執掌シタル實ニ負フコト亦タ甚タ大ナリト謂ハサルヘカラス此ヲ以テ曩者明治四十二年本大学創立二十五年記念会ヲ催スニ當リ本大学ハ奥田文庫ヲ校内ニ設ケ以テ聊感謝記念ノ微意ヲ表シテ尋テ有志胥謀リテ独逸ビルクマイヤー博士ノ藏書全部ヲ購ヒ之ヲ奥田文庫ニ寄贈シ其ノ文庫ヲシテ一層ノ光彩ヲ放タシム不幸ニシテ本年六月端ナク火災ニ罹リ校舍全部ヲ擧ケテ烏有二婦シ奥田文庫亦終ニ免ルルコト能ハス當時故学長頗ル多端ノ公務ヲ佩ヒ其ノ健康亦常ニ非スト雖日夜營營トシテ火災善後ノ策ヲ講シ僅ニ校舍仮設ノ議ヲ定メ其ノ他百般ノ施設尚未了ニ屬スルノ際遽ニ重患ニ陥リ終ニ白玉樓中ノ人ト為ル嗚呼天ノ我中央大学ヲ禍スルコト何ソ夫レ類類タル前難未タ去ラスシテ後患来リ人ヲシテ転々天道ノ是非ヲ疑ハサルヲ得サラム今ヤ本大学ハ校運極メテ隆昌ナリト雖之ヲ大局ヨリ達觀セハ尚發展ノ初步ニ屬シ今後宜ク規画經營スヘキモノ尠シト為サス是レ皆故学長ノ手腕德望ニ待チテ始メテ之ヲ完成スヘク而シテ其ノ人今ヤ則チ亡シ痛嘆曷ソ夫レ勝フヘケムヤ意フニ校舍及圖書ノ焼失ハ真ニ本大学ノ一大不幸ナリト雖吾人ハ以テ已ムヘカラサル一時ノ災厄ト為シ銳意之カ復旧ニ努力セム單リ回スヘカラサルモノハ故学長ニシテ英魂永ク眠リテ呼ヘトモ答ヘス之ヲ奈何ノ哭シテ且ツ慟セサルヲ得ムヤ

齋テ故学長ノ人格ヲ觀ル故学長ハ資性頗ル高潔ニシテ温厚円
 熟ノ君子人ナリ友情ニ厚ク俠氣ニ富ミ道義ノ念燃ユルカ如ク
 責任ノ感極メテ深シ澆季ノ今日一朝ニシテ此ノ君子ヲ喪フ冥
 冥ノ間徳化風教ニ及ホスノ影響蓋シ尠少ナラサルモノアラム
 若シ夫レ故学長ノ公人トシテノ手腕力倆ニ至リテハ天下夙ニ
 定評ヲ存シ其ノ立法及行政ニ現ハレタル偉勲赫赫トシテ人ノ
 耳目ニ在リ此ヲ以テ世皆其ノ前途ニ囑望シ期待頗ル切ナリシ
 ト雖今ヤ全ク空望ニ帰ス嗚呼故学長ノ薨去ハ実ニ本大学ニ対
 スル一大打撃ニシテ之ヲ披ムレハ則チ国家社会ノ損失ナリ為
 ニ血涙ニ咽フ者豈單リ吾人中央大学ノ徒ニ止ラムヤ然リト雖
 夭寿固ト命アリ千憾万恨事ニ於テ將タ何ノ益アラム故ニ吾人
 ハ徒ニ痴言ヲ累ネテ婦女兒ノ態ヲ学フコト為サス唯唯今後故
 学長ノ意ヲ体シ其ノ遺策ヲ遂行シ益々校運ノ發達ヲ図リ以テ
 故人生前ノ希望ヲ死後ニ實現セムコトヲ勉メテ敢テ懈ルナカ
 ルヘシ此ノ如クニシテ故学長亦以テ瞑スヘク真個追悼ノ意義
 即チ此ノ点ニ在リト信ス嗚呼故学長ノ英靈ヨ庶幾クハ快然来
 リテ此ノ壇ニ鎮マリ以テ其ノ生前ノ知友及門生等ノ微忱ヲ容
 レタマハムコトヲ嗚呼哀哉尚クハ饗ケヨ

次に花井博士は學員総代として左の祭文を朗読せられ

維時大正六年十一月念八、拜稽首謹祭我中央大学学長故奥田

先生之靈

吁我夫子 一代之望 徳高識遠 材推棟梁
 集徒講法 学曰中央 經紀靡懈 薰育有方
 自南自北 書生满堂 彬彬成学 举荷恩光

玲瓏如玉 克温克剛 徑直似矢 維行維蔵
 以賛教化 以編典章 迺任市尹 迺班廟廊
 干公干私 無適不良 營營恪謹 令名是香
 可恨狂蠶 遽起扶桑 奪此国器 移之北邙
 仰皇天慟 皇天蒼蒼 俯后土哭 后土茫茫
 吁我夫子 今那辺俛 英姿不見 空憶甘棠

次に川上清氏は學員会関西支部を代表して左の如く

大正六年十一月二十八日中央大学學員会関西支部京都在住者
 総代川上清謹テ故学長奥田先生ノ靈位ニ告ク伏テ惟ニ先生ノ
 世ニ在スヤ夙ニ功ヲ法制ニ奏シ徳ヲ政治ニ施シ文相タリ法相
 タリ或ハ代議士ニ或ハ首府ノ市長ニ選マレ賞賜ヲ重ネ勲位ヲ
 進メ奉公致誠ノ偉且盛ナル僕ヲ更ルモ之ヲ悉クスニ違アラス
 茲ニ不肖清等ハ嘗テ親ク法典講究ノ恩義ヲ辱スルヲ以テ感想
 ノ一班ヲ披瀝セントス即チ先生ハ中央大学ノ創立者ニシテ躬
 ラ教鞭ヲ揮ヒ能ク撫育ノ道ヲ披メ敢果ノ勇、活裁ノ明以テ濟
 濟ノ佳境ヲ占有ス蓋シ強立ノ花ハ權威ノ実ヲ結ヒ内勳ノ精ハ
 外摸ノ夢ヲ破リ不倦不息要ハ皇運ノ大勢ニ報ユルニ在リ殊ニ
 親族編相統編ニ於テ学殖造詣ノ譽ハ良博士ノ名ニ乖カス桃李
 滿門出藍ノ才ハ朝野ニ呼応シ前途不測ハ亦宜ナラスヤ然ルニ
 溘焉薨去セラル曷ソ哀惜ニ勝ヘン顧フニ先生ニ朝ニ歴仕シ特
 ニ叙爵ノ光荣アルニ至ル今ヤ復タ醫咳ニ接スルヲ得スト雖其
 遺範ハ本学中ニ儼存シ法治ノ異彩ハ長ヘニ昭代ト俱ニ發揚ス
 ルモノアレハ幽明相照サンノミ庶羞盛儀ノ末ニ陪シ聊カ微衷
 ヲ布ク尚クハ饗ケヨ

次に小八重直三郎氏は法科学生を代表して左の如く

維時大正六年十一月二十八日中央大学法科学生小八重直三郎
謹テ故学長法学博士男爵奥田義人先主ノ大前ニ白ス

生等法律ヲ本饗ニ学フヤ一ニ先生ノ人格ヲ慕ヒ其高風ノ感化
ヲ望ムニ在リ然ルニ先生常ニ邦家ノ重職ニ鞅掌セラレテ復寧
日ナク其警咳ニ接スルコト少カリシト雖モ生等入学ノ初年マ
テ躬ラ親族法ノ講座ヲ担当セラレタルヲ以テ生等ハ実ニ先生
最後ノ門弟子ナル悲ムヘキ榮譽ヲ担フモノナリ感慨何ソ堪ヘン
先生平素方正謹嚴儉素自ラ持シ以テ生等ノ德操ヲ涵養セラレ
一度講壇ニ立タルルヤ論議縱横諄諄トシテ倦マス而シテ壇ヲ
降ルヤ沈思黙考靜ニ歩ミテ出テラルルヲ常トセリ先生ノ温容
恍トシテ今尚ホ目睫ノ間ニ髣髴タルヲ覺ユ先生嘗テ隱居制度
ヲ講セラルルニ当リ余モ齡六十二達セハ断然公職ヲ辞シ専ラ
余生ヲ学問ト教育トニ委ネント宣ヒタルコトアリキ今ニシテ
想ヘハ先生ノ意ハ一ニ我中央大学ノ経営ト育英トニ存セシナ
ラン然ルニ今ヤ先生長ヘニ在マサス生等ノ期待ハ徒ニ過去ノ
追懷ト為レリ嗚呼悲哉

然リト雖モ恩師生前ハ高位榮爵ヲ授ケラレ薨シテ後ハ公葬ノ
盛儀ヲ行ハル洵ニ人生名譽ノ極ニシテ又我等学生ノ誇トスル
所ナリ此ヲ思ヒ彼ヲ想フテ今日ニ至レハ疾ク既ニ先生十旬ノ
忌ニ会フ哀悼ノ情極マリテ言フ所ヲ知ラス茲ニ法科学生ヲ代
表シ恭シク蕪辭ヲ捧ケテ先生ノ靈ヲ祭ル英靈尚クハ来リ響ケヨ

次に竹村熊四郎氏は経済科学生を代表して左の如く

恩師奥田義人先生病魔ノ侵ス所ト為リ忽然トシテ長逝セラレ

テヨリ月ヲ数フルコト既ニ四、今日茲ニ先生ノ靈ヲ祭ルニ際
シ追慕ノ情益々切ナルモノナクンハアラス先生ハ本学創立者
ノ一人ニシテ創立以来公務多忙ノ身ヲ以テ或ハ理事トシ或ハ
学長トシ或ハ講師トシテ終始校運ノ隆盛ト学生ノ指導ト其二
力ヲ致サレタルコト実ニ三十有余年ノ久シキニ及フ先生ノ生
等ヲ導クヤ愛撫扶掖諄諄トシテ倦マサルコト猶ホ慈母ノ愛見
ニ於ケルカ如ク加フルニ其人ト為リ真摯高潔ニシテ高明正大
赤誠以テ事ニ当ラルル所常ニ生等ノ敬慕措ク能ハサリシ所以
ナリ吾中央大学ハ曩ニ校舍ヲ失ヒ爾後百般ノ施設先生ニ埃ツ
所甚タ大ナリシニ天無情斯人ヲ奪ヒ去ルハント欲スルニ跡
ナシ悲マサラント欲スルモ豈ニ得ヘケンヤ

先生ノ社会国家ニ於ケル功績ノ顯著ナルニ至リテハ天下ノ夙
ニ認ムル所洪語ノ能ク尽スヘキニアラサルナリ

先生今ヤ即チ亡シト雖モ赫赫タル功績ト崇高ナル人格トハ永
ク伝ハリ必スヤ生等鞭撻ノ鞭タルヘク生等向上ノ羅針盤タル
ヘシ生等而今以テ誓テ本大学創立ノ精神ヲ体シ穩健ナル学風
ト著実ナル校風トノ発揚ニ努メ確ク先生ノ遺教ヲ守ランコト
ヲ期ス其レ然ル後聊カ先生在天ノ靈ヲ慰ムルニ庶幾カラシカ
愛ニ経済科学生ヲ代表シ尊崇追慕ノ誠意ヲ表シ虔ミテ恩師ノ
英靈ヲ祭ル

次に加藤季八郎氏は商科学生を代表して左の如く祭文を朗読せ
られ

白楊悲風多ク蕭蕭トシテ哀風逝キ淡淡トシテ寒波生シテ人ヲ
愁殺ス時維レ大正六年十一月二十八日中央大学学生一同清酌

庶羞ノ奠ヲ以テ謹ミテ學長奧田義人先生ノ英靈ヲ祭ル先生ハ立法家トシテ法學者トシテ將タ又賢相良尹トシテ夙ニ朝野ノ依リテ以テ重シトスル所ナリ

先生ハ激職繁務ノ間常ニ磐根錯節ヲ開キ快刀乱麻ヲ断チ匪躬ノ義ヲ一貫セラレシカ去八月不幸ニシテ微恙ヲ患ヒ小暇ヲ以テ養ヒ而シテ小康ヲ得ラレシモ其ノ中旬ヲ過クルヤ俄ニ病革リテ危篤ニ瀕シ方ニ生死ノ間ニアリ而モ尚且ツ意識明確ニシテ其ノ意匠沈吟ヲ凝ラサレシ電灯案ノ認可ヲ聴キ始メテ安堵以テ快心ノ笑ヲ漏ラサレ其ノ微笑ノ未タ消エサルニ先生溘焉トシテ眠ルカ如ク昇天セラル思ヘハ先生臨終ノ此ノ微笑ハ蓋シ無限ノ感懷抑ヘ難クシテ其ノ一端ノ流露セシモノナリシナラン

先キニ先生ノ同志ノ士ヲ叫合シテ自ラ稱首トシテ我大學ヲ扞立セラレシハ明治十八年八月ノ事ニ係カル爾來先生ノ高德博識以テ日夜經營精勵セラレ激務鞅掌ノ間寸暇タニ無キニ親シク薰陶ヲ垂レ給ヒ諄諄教ヘテ倦マス陽ニ陰ニ常恒不斷真摯熱誠ヲ尽シテ我等弟子ヲ指導誘掖鼓舞獎勵セラレ輒チ校運日ニ隆興シ人材彬彬トシテ出ツ然ルニ昊天何ソ夫レ無情ナル先キニ我大學ハ祝融氏ノ災ニヨリテ貴重ナル奧田文庫ト宏壯ナル校舍トヲ失ヒ更ニ復タ此ノ名學長ヲ失ヘリ悲愴哀痛茫然為ス所ヲ知ラス

先生温以テ人ニ接シ剛以テ事ニ処セラル温情威儀今ニシテ之ヲ思ヘハ温情威儀兩ナカラ兼ネ備ハリテ円満崇高ナル人格ハ燦トシテ煥發セラレ靄然タル温容懇篤ナル心事風丰ノ外ニ露

ハル然ルニ今ヤ之ヲ仰カント欲シテ視ル能ハス嗚呼悲哉真ニ此レ断腸ノ哀、傷心ノ悲、情ハ惻惻トシテ心ヲ摧キ涙ハ愍愍トシテ眼ニ盈ツ嗚呼命耶數耶痛哉サハレ泉門一度掩ヘハ遂ニ復タ如何トモスルナシ唯愁雲憂霧徒ニ惆悵ノ情ヲ擅ニスルハ必スシモ英靈ヲ慰メ奉ル所以ニアラス生等意ヲ一ニシ心ヲ誠ニシ以テ先生カ遺教ヲ遵奉操守シ只管違誤ナキコトヲ期ス尚クハ魂髣髴トシテ來リ饗ケ給ヘ

次に中華民國留學生總代公輓氏は恭しく左の祭文を捧げられ

奧田先生誄

維歲次丁巳秋八月前日本中央大學學長法學博士男爵奧田先生捐館舍歿後百日留學同人追維旧誼永懷前脩爰為文祭之 先生生當東邦變政之候出際滄海橫流之時初則砥行以蘄學士林蜚英繼則學古而入官台閣挺秀鴻材駿伐自堪矜耀於當時道貌遺風亦足稱名於沒世溯斯校之扞始實 先生之豐功經營慘淡歷十余年弘造菁莪逾千百衆凡我中華同人負笈以來乘風而去者前後亦數百人一堂濟濟欣桃李之栽培終古悠悠遽山梁之頽壞嗚呼北邙一去士子同悲西州再過學人增痛楚些細無益於招魂哀誄端宜於述美其辭曰

鄉稱道德德國重老成世有作者足資式衡藹藹吉人挺生三島遺聞令譽擒華揆藻致身顯要宣力宗邦遭時有造並世無双立說著書珍逾片羽開誠布公愛遺編戶設學納士教之誨之望尊山斗道重人師凡我留學共深仰止弘開堂室欣陪杖履龍門百尺杏壇三千撞鐘鼓瑟無或間然歲在龍蛇天降火鳥祥麟威鳳遐不壽考至善無年大材易摧哲人其往生榮死哀笑貌如存几席遙矚述美贈終生芻

十一月二十八日

中華民國留日中央大學學生公輓

以上を以て嚴肅裡に式を終り別室に於て茶菓の饗応ありて三時半散会したり当日の出席者は穂積男爵元田肇氏土方博士其他講師學員等學校關係者並に學生二千余名出席しさしにも広き大講堂も殆ど立錫の余地なき有様なりき因に当日奥田家よりは未亡人及び嗣子剛郎氏出席せられ式後剛郎氏より叮重なる謝辞ありたり尚ほ各地方學員會支部並に學員諸氏より電報を以て追悼の意を表せられたるもの尠からず

追悼の式は以上を以て終了したるか午後五時より更に同大講堂に於て學生諸氏主催の下に追悼演說會を開催す學生側にては飯森徳右衛門、齋藤孝一郎、鳩山正夫、片山秀樹、倉橋庄一郎、坂崎靜夫、加賀屋金作、坂本慶一、西方利馬、加藤季八郎、足立辰雄、鳩谷淑人、末次龜六、加瀬文雄、上村清敏、馬越旺輔の諸氏委員と為り数日前より熱心に奔走して先輩諸氏の贊助を得學校側よりは天野徳也氏参加して共力準備に従事し定刻聴衆の堂に滿つるや天野氏登壇開會の辞を述へて曰く『閣下並に諸君、本日は故奥田先生の百個日に当ります光陰矢の如くと申しまするか吾吾は先生か今日を去ること一百日前に薨去せられたるものとはどうしても思ふことか出来ませぬ先生の薨去はつい先頃のことであつたやうに思ふ否な吾吾の精神の裡からは如何にしても奥田義人其人の偉大なる人格を瞬間と雖も奪去することは出来ませぬどう考へて見ましても先生は今尚生きて居らるるやうに感ずるのであります蓋其然る所以のものは何んであるか

曰く外ではない先生は実に肉に死して靈に生きて居られるからであります此事たる豈に啻に百日のみならんやてこさいます惟ふに先生の偉大なる人格は無量寿であつて千万年の後と雖も世道人心を教化し感化して行かふことと存します恐くは満堂の諸君に於かせられても固より御同感と思ひます、今日は故先生の百個日でありまして本大學に於ては先刻皆さんの御承知の通り嚴肅なる追悼の式を挙行致しました吾吾の故先生を追慕するの情は愈々益々新なるを加へて参つたのでこさいます、是に於てか今夕は只今から故先生を追慕するの余學生諸君か主催に為り先輩諸賢の熱心なる御賛成の下に爰に莊重なる追悼演說會を開催して故人の高風清節を反省致すことに相成りました、吾吾委員のふつつかなる諸般の準備に於て不行届の点甚だ尠からずと考へ皆さんに深く之を謝すると同時にこれより登壇せられまする諸君子の痛烈なる御演說は必ずや故先生生前の倂を眼前にありありと髣髴たらしめ先生の遺徳を發揮し先生の遺教を顯揚することか出来ることと確信致しまして切に皆様の御静聴を希ふ次第てこさいます』それより末次龜六氏登壇『學生時代に於ける奥田先生』と題し先生の學生時代に於ける勤勉勇氣意責任尊重等の諸点に於て吾人の模範とせざるへからざる美德を頌し各自の自重を希望して降る次に學員武田明氏出て『故奥田先生を思ふ』と題して明治二十一年以来の親交を語り先生の自分を指導したる有様に及び先生の事業に關聯して先生か智仁勇の三徳を具備せられたることを述べ徳の光は生前よりも死後愈其明を發することを説き先生の偉勲は永く滅せずと結ひて降る次

に西方利馬氏登壇「故奥田先生の学生に示されたる教訓」と題し先生が嘗て青年は室外の空気の如く老人は室内の空気の如し室外の空気若し腐敗せはそれ之を如何んと警告せられたる語を引て青年の大に自重奮起せざるへからざるを説き又学生は修養を第一義とし運動の如きは之を従として為さざるへからすと教へられたることを反省して故人を追慕し次に弁護士太田資時氏は「奥田博士の性格に就て」と題し其二十八年間に亘る交際の状況を逸事と共に面白く物語り故人には過を再びせざることを人の秘密をは絶対に確守して親友にも決して之を語りたることなかりしことの美德ありしことを述へ次に坂崎静夫氏は「熊澤蕃山と奥田先生」と題し時代は変遷し思想は流転す現在は過去と為りつつあり生命の上に「クリエーション」を為すものは偉人なり運不運を貫きて英雄的事業を確立するは容易のことにあらず而して熊澤蕃山と我奥田先生は実に其人なり熊澤氏が備前公を助けて彼の偉業を遂行したるは実行の手腕と大至誠との結果なり彼か出色の点十五ある中幕府時代言論の圧制に抗して正論を主張したるは其最も著しき所なり此点豈に我奥田先生の群議を排して東京市の難事業を解決したると相類せずやとて故人の偉人格を称し次に上村清敏氏は「至誠を以て一貫したる奥田先生」と題し至誠は絶対の權威なることより説き起して今日先生を追慕する所以のものは先生の至誠を以て一貫せられたるに在りとし先生の性行に基きて之を説明し次に大場博士は「奥田先生の学術的方面」と題し先生は最も多く世に用ひられたる方にして実際の方面に渾身の精力を傾倒せられたるにも拘らず

又常に学術的方面に於て研究し努力せられ通常人ならんには既に何事も為し得ざる時を利用して勉強せられ中央大学帝国大学早稲田大学等に於て講義をせられ剩へ親族法論、相続法論、法学通論、清貧論、学生論、熊澤蕃山等の著書あり且講義録としては親族法、相続法の外旧きものに私犯法等あり尚ほ近年親族法の大著述に従事せられ天若し斯人に半年の寿命を假さは此名著は世に出てしならん又講義は英国憲法、私犯法、法学通論、旧民法の各部の外現行民法の各部に亘り先生が専ら親族相続に力を入れられたるは比較的に新しきことなり以上を以て固より先生の学才の全部なりとすへからず若し先生が専一に学術研究に従事せられたらんには必ずや一世を驚倒せしむるの大著述も数多世に出てしならんと思ふ而して先生の学術的功績を表彰するものに奥田文庫なるものありビルクマイヤー博士の蔵書全部を包括する世界的大文庫なりしも此文庫は今や焼失せり斯く先生も先生の学術的功績を表彰する文庫も共になければと唯夫れ先生の遺志は存せり吾等同人は此遺志を継かざるへからず是れ吾人の任務なりと述へ齋藤孝一郎氏は「故奥田先生の修養と吾人の覚悟」と題し吾吾現在法科三年生は入学初年奥田先生に親族法の教授を受けたる先生最後の門弟なり故に追慕の情一層切なるものあり吾人は先生の識徳を仰き種種称揚すべき辞ある中に余は先生の斯る偉人格を生み出したる平素の御修養の一端を想像し之を石川文山の坐右の銘たる大丈夫の五則に見出さんとて度量、気節、敬畏、懐襟、温藉の五つに別つて故人の修養を追想し進みて先生の人格を歴史上の人物に比せんに徳川家康よ

り狡猾の点を去れば先生と為り乃木大将に大度量と機略とを加ふれば即ち先生と為ると断し吾人は先生の生前より学ひ得たる人格学識を基本とし今後永く先生の遺訓を服膺し以て吾校風的美感を發揮し合せて先生の英霊に答へんことを期する旨を述へ花井博士は『吁我奥田先生』と題し故先生は我等の崇敬すへき唯一の恩師なり余の忘れんと欲するも能はざる恩師なり先生の為めに言ふへき事項甚だ多くして而も其一つたも省略すること能はざる所よりして他日一書を著して之を後世に伝せんとす今夕は唯自分か法学新報に掲けたる追懷録を朗読することとせんとて之を讀りて更に江木博士の書簡を讀み上く其書簡の終りに中央大学の跡始末も岡野馬場松本諸氏か引受けられたので奥田も浮かへるのである男爵も何んでもない市葬も何んでもないといふ一節あり満堂悉く首肯せざるなき模様なりし斯くて弁護士福田市太郎氏は『公論敵に在り』と題し痛切なる語調につれ市政問題に反対意見を有し居たる横山勝太郎氏との問答を語り同氏か如何に先生の偉大なるに敬服し居るかを述へ自分か卒業の際先生より本大学は本家て諸君は分家であるから今後互に離れられぬ關係に立つて居るのであると訓示せられたることを反省し感慨無量の概あり次に新帰朝者學員高宮誠氏は『至誠の人奥田学長』と題し自分は米國留学中米人より君は何学校出身なりやと問はるる毎に大なる誇りを以て中央大学出身なりと答へたるか其故如何となれば本大学には至誠の奥田学長ありしを以てなり余輩の卒業に際し故学長は渡邊華山^(華)か赤貧洗ふか如き間に在りても片時も国事を忘れざりしことを以て訓示とせられ

しことを思ひ起す吾人は相共に故人の遺志を継かざるへからすと述へ原博士は『人格の奥田先生』と題し余は永年本大学に關係するも学生諸君に接する機会少なし幸ひ本夕は諸君の前に立ってお話することと為りたるを以て是非諸君に聞いて貰ふへき事あり抑も故奥田先生の人格の高潔なりしことに付ては抽象的に何人も之を知り居れとも何か故に故人の人格か左様に偉大なりしかに付き多くの人は具体的に之を知れりや恐くは之を知らぬ人少なからすと想像す故に余は具体的に二三のお話を試むへし世間にては博士か学生時代に乱暴なりしやう云ふものあれども誤れり博士は決して乱暴書生にてはあらざりき所謂大学暴動事件の当時余は博士と共に之か処分を受けて一旦退学を命せられたる一人にして自分の方よりは能く博士の人と為りを知り居りしか決して乱暴するか如き人にあらすして温厚の学生たりしなり明治十六年の騒動は賄征伐と称せられ居れとも決して眞の賄征伐にあらすして学校当局者に対する不平よりして賄征伐を爲したるのみその騒動は頗る大なりし為め学校に於ては放置すること能はずして学生百四十何名に退学を命したるか博士は当時法科上級の首位に在り而して学生一同は盟約を確守し居りしを以て奥田義人外百四十何名云云といふ事になり博士か乱暴の巨魁なる如く誤解せられたるに過ぎず併し当時博士は訊問答弁書中に自分に一切の責任ありといふことを述べられたる為め先生の如何に犠牲的精神に富み居られたるかを知るに足るへし先生は実は公の為に私情を棄てられたる方なりき余は卒業当時より直に弁護士たらんとせしも資金なく已むを得ず田中文藏君の紹

介にて当時特許局長たりし奥田先生に面会してその尽力に依り農商務省に入ることを得たり然るに後に至り聞く所に依れば自分か先生に面会せし時は同級生某氏既に先生と同郷の因縁に依り就職することに内約纏まり居りし所なるに聞はらず先生は其人をは他に転し殆と一面識もなかりし自分の方を採用せられたる次第なり是れ蓋余の方か学校の成績宜しく公の為には同郷の因縁の如き私情を棄てざるへからすといふに在りたるや明なり若一切の政事家か斯る公正の見地に立ちて人材を登用するならんには今日の所謂閥族なるものは生せざりしならん先生は又責任を重んずる人なりき先生か農商務省を去られたるは当時の大臣と其所見を異にしたる結果辞職せられたるなり其時伊東三代治子爵先生の英才を惜み官報局長に推薦せり余も亦久しからずして農商務省を去らんとし先生に相談したる所賛成せられたるに付き早速辞表を呈出して先生を訪ね金融を乞ひたるに先生は直ちに快諾せられ其資金にて弁護士の開業を為したるか後に聞く所に依れば先生は他より証文を出して高利にて借受けて之を自分に無利息無証文にて融通し呉れたる次第なりと云ふ斯の如きは実に先生ならされは出来得ざる所なり是れ余一人のことなるか先生歿後に於ける財政状態の実に清貧以上なりし事実の現はれたる如き全く先生の私的生活に基くものにあらすして全く他人の為め世の為に尽されたる理想的の犠牲的精神に由来するものたるは言ふまでもなきことなり而して斯る精神は独り財産上に顕はれ居るのみならず先生の功業の総ての上に歴然たるものあり云々と述へ次に『吁尚武の奥田先生』と題し飯森徳右

衛門氏は感想を詳述せらるへき予定なりしも時既に遅く為めに極めて簡単に先生か先年中央大学辞達学会に臨み自分は大部分は寄つたか百二十五歳までは大丈夫たと言はれたる一語を追想して感慨に耐えざるものあり先生の長逝は吾等の、本大学の、我法学界の、而して国家の一大損失なり回顧するに先生は身を持する頗る儉素にして人を救ふに勇に大に古武士の気概に富ませられたり今先生の教訓を思ふに清貧論の中に先生は驕るもの久しからすと題し驕奢の心は家を破り節儉の心は身を存す奢侈贅沢は必ず其身を滅し家を滅し遂には社会国家に災するものであるとあり是れ実に先生か吾吾に訓へられたる所たるのみならず一生の間先生か実践窮行して範を天下に垂れ玉へる所なり聞く先生の平生は極めて質素にして食物の如きも豆腐を愛用せられつつありしと以て一切を窺ふに足らん吾人は暫て先生の遺教を服膺せんことを期せざるへからすと述へ次に『奥田義人先生を懐ふ』と題し學員横田稔氏は吾人学に志して博士と為ること決して難からず政治家たらんとして大臣たること必しも難からず唯博士と為りて千古の智勇を推倒し万古の心胸を開拓するを難しとす唯大臣として台閣の上に重きをなし千載の下尚ほ其功勳を仰かしむるを難しとすこれ其人に大至誠、大努力あり犠牲的大精神なくは得て望むへからざる所なり而して我奥田先生の如きは実に博士として学界を風靡し大臣として偉勳赫赫たるものならずや嗚呼先生の如きは時流に超然として偉大なる所ありしもの、誠に敬慕の情に耐えすとして肺腑を貫くか如き熱弁を振はれ最後に松本博士は『所懐』と題し述へらるるへき筈なりしも

時間の都合上唯其概略のみを述べて先生は実に幸福の人なり蓋先生は世を益することを以て其樂みと爲し居られたればなり世間には世を害することを以て樂とし又は世を害せず又利せざることを以て樂とする人あり一は大不幸の人二は未だ以て幸福の人と爲すへからず唯善を樂むこと先生の如くして始めて大幸福の人と爲すへしとて以上を以て全く追悼演説を終り博士は更に閉会の辞を述べて聴衆の寒威を冒し深更まで多数静肅に傍聴せられたる好意を謝し其全く散会したるは午後十時に垂んとす斯日尚ほ講師林頼三郎氏外学生加賀谷金作、足立辰雄、鳩谷淑人の諸氏も登壇せらるへき予定なりしか時間乏しく已むことを得ず以上にて閉会に及ひたるは誠に遺憾なりし因に当夜聴衆千余名の多数に上り馬場松本の両理事並に佐藤幹事及び林講師が最終まで出席せられたるは演説会委員の深謝し居る所なり（委員報）